

ドクターインタビュー

熊谷 直樹(くまがい なおき)先生

くまがいこどもクリニック 院長

兵庫県尼崎市、阪急神戸線「園田」駅から徒歩2分。「くまがいこどもクリニック」は平成3年に開院され、急な病気やアレルギー疾患の診療はもちろん、学校や保育園など地域の子どもの健康管理の役目も担う、院長の熊谷先生にお話を伺いました。

——先生が小児科医を目指されたきっかけなどお聞きかせください。

父が小児科医でしたので、自然と小児科医を目指しました。医学部を卒業後、兵庫医科大学小児科講師、トロント小児病院(カナダ)留学などを経て、もっと身近に子どもに接したいと思い自分が育った東園田町でクリニックを開院しました。

子どもには未来があって、治る病気が多い。大人の治療は出来上がった体がダウンヒルしていくことを食い止めることが主ですが、子どもは発達の途中なので、上り坂を助けることが小児科医の仕事だと考えています。地域の子どもの活き活きと育てていくために少しでもその手助けが出来ればと心がけています。

——日々の診療で感じておられる事やクリニックの特徴について教えていただけますか？

小児科は特に患者さんや保護者の方とのコミュニケーションが大切です。医師だけが病気の対応をするのではなく、看護師からも治療の説明などを行っています。これも看護師の大事な役割だと考えています。当院のスタッフは16人で、内看護師が7人いてチームワークを大事にしています。まず、待合室で看護師が病状を聞き重症の子や伝染病の子を早く見つけます。そして診察が終わってからも看護師が、医師の説明で患者さんが理解出来たかどうかを確かめます。治療について分からないことがあれば、そこでもう一度看護師に質問してもらいます。医師は診断して治療の説明をするのですが、診察室では保護者の方は緊張してしまったり、いろいろ質問しようと焦ってしまったりでうまく説明を聞けていない場合も多いですね。患者さんにとっては医師の前では質問しにくいことも、看護師になら聞きやすいというところがあるようです。また、診察の際、様々な病気や予防接種に対応したリーフレットを使用して説明しています。リーフレットには、症状や治療の説明、家庭で気を付けることなどが分かりやすく記載しています。持って帰って見ることが出来ますし、父親や祖母の方が付き添いで来た時など母親に診断や治療内容を説明するときにも使えますね。このように、診察以外でもスタッフが連携することで、患者さんや保護者の方が病状を理解して安心して治療に取り組めるよう工夫しています。

——食物アレルギーについて、最近の傾向などございますか？

食物アレルギーの患者さんは増えていると感じています。免疫療法はまだ実験段階ですが、出来るだけ食べた方がいいと言われてますね。食物アレルギーにはさまざまな症状があります。必要であれば検査をしますが、検査であやしい食べ物が見つかったも、必ずしも食物アレルギーとは言えません。だいたい食物アレルギーは3~6歳くらいで治ることも多いと言われてます。前回食べたときは症状が出たのに今回は出なかったということもあるので、食物アレルギーについて過剰反応するのは良くありません。何度も同じことがあれば無理かもしれないけれど1回だけで断定するのは早いと思います。多少アレルギーがあって湿疹が出てアナフィラキシーショックを受ける程でなければ、食べてみたらと言っています。トライするタイミングは難しいですが、病院に来てから食べてみましょうとか、病院が開いている時間に食べて何かあったらすぐ連絡くださいとかね、そういうことをして対応しています。

——貴院で行っておられる「小児心理カウンセリング外来」について教えていただけますか？

当院では、子育ての不安、発達が遅れ気味、自閉症や不登校などの問題でお悩みのお子さんや保護者の方を対象に、臨床心理士と心理カウンセラーや発達検査を行っています。臨床心理士は、心理学の知識を生かし、心の問題に関する専門家です。担当の臨床心理士が週2回、1人1時間程度、個室でゆっくりカウンセリングを行っています。これは、子どもさんが一人で直接来ることもあるし小さいお子さんだとお母さんと一緒にこともありますね。お母さんのカウンセリングは

DOCTOR INTERVIEW



熊谷 直樹(くまがい なおき)先生のプロフィール

【ご経歴】
 岐阜大学医学部卒業。
 兵庫医科大学小児科講師。
 カナダのトロント小児病院留学。
 1991年 小児科 くまがいこどもクリニック開院。

【所属】
 日本小児科学会専門医
 兵庫県小児科医会会長
 日本外来小児科学会元会長

保健所、学校、幼稚園や保育園での子ども達の健康管理。
 医学生への講義やクリニックでの小児科の実習など医学教育も行う。

DOCTOR INTERVIEW

行っていませんが、必要な場合は対応します。

カウンセリング外来を始めたのは、私自信も学生時代など少し携わっていたこともあります。クリニックを始めてとても必要なと感じたからです。専門の機関にかかるまでに、対応出来る紹介先がありません。紹介先というのは、酷くなったときは精神科、後は学校、教育委員会、保健所などですね。精神科のケースだと小児精神科は少ないので半年待ちとかになってしまふ。対応するまでの間をなんとかしたいと考え10年程前から始めました。不登校などはカウンセリングでなんとか出来ることが多いです。親でもない、医師でもない人には割と本音を話せるような、まあ1時間あれば多少打ち解けるのかなと感じています。暴力的なことになれば、小児精神科のある病院を紹介しています。臨床心理士のいる小児科は徐々に増えてきていて、心理士によって関わり方はそれぞれですけど、私の所に来てくれる方は非常に優秀で医師と一緒にチームワークで治そうとしてくれるので助かっています。多いのは発達障害のお子さんですね。動き回る、トラブルが起きるなど学校で指摘されて診断してほしいとか、教育委員会から当院を紹介されて来る方もおられますね。カウンセリングの結果、この子はこういう特性があると分かれば最近では学校側の理解が増えていますし、本人が変わらなくても周りの対応が少しずつ改善されていきます。そういうことでも今の役割に意味があるのかなと考えています。

——患者さんや保護者の方にメッセージをお願いします。

子どもの病気は治るのが原則。なので、薬も検査も出来るだけ少なく考えています。アトピー性皮膚炎も食物アレルギーもあつという間に治すことは出来ません。長い目で付き合いつつ、一時的に悪くなってもがっかりしないでがんばりましょう。また、ネット情報に惑わされないようにしましょう。一部本当のこともあって中にはそれで良くなる人もいますので、一概には間違っているとは言えないけど、自分の体験を掲載しているものが多く、あくまで個人の感想ですと記載されています。特に重症の方は、やはり何でも挑戦してみたいと思う気持ちは分かりますが、金銭トラブルに遭って明らかに悪化するようなものもあるので、必ず主治医に相談してみましょう。

——ありがとうございました。クリニックではより親しみを感じてもらうため、昨年よりブログを立ち上げ、スタッフの方が交代で情報を発信しているそうです。先生はスタッフとのコミュニケーションを大切にされていて、ブログでは新年会の様子やイベントの様子が紹介されています。また、先生の趣味は山歩きで、今は健康のために片道4キロを歩いて出勤されているそうです。